

Atsugi

Public Relations Paper Atsugi City

広報あつぎ

2020

12.1

No.1340

index

- 2-8 特集 非日常から見てきたもの
変わらない大切なこと
- 9 街の話題/コラム
- 10 RPA導入でサービスを充実
- 11-12 お知らせ/コラム



特集：非日常から
見てきたもの

変わらない
大切なこと

長い歴史の中で、人類は何度も感染症と戦ってきた。数百年前、医療の発達していない時代に病魔を防ごうと人々が頼ったのは、神仏の力だった。その一つである道祖神は、悪い病気や災いが入らないよう集落の境に置かれたものだ。身近な場所でも人々を見守る小さな石像たちには、子どもや家族、地域に暮らす大切な人を守るようにする住民の思いが宿っている。

2020年、新しい感染症が世界中の人々を襲った。マスク、消毒、身体的距離。人と笑顔を交わし、触れ合い、ぬくもりを分かち合う当たり前の暮らしは一変し、孤立や格差など、社会が抱えてきた課題を浮かび上がらせた。

今日までの当たり前が明日変わるかもしれない、激動の時代。でも本当に大切なことは、きっといつの時代も変わらない。特集では、非日常の1年を過ごした市民の声から見てきた課題を見つめ直し、地域や人とのつながりを考えてみた。

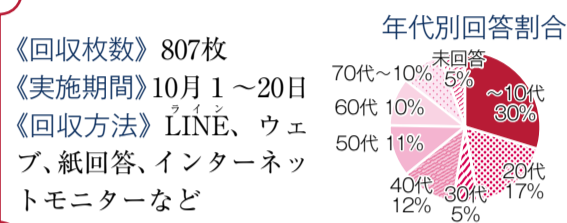
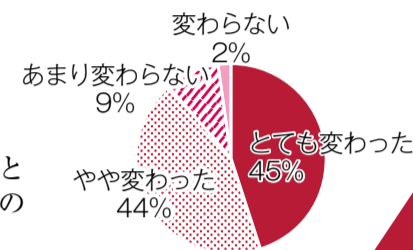
《2～8面に関連記事》

“ウィズコロナ”の前と後

新型コロナウイルスと共にあった2020年。生活のリズムや学び方、人とのつながり方など、多くのものが変化した。実際に何が変わったのか、変わらなかったものは何か、アンケートで市民の声を聞いた。

市民の声 voice コロナ禍で生活は変わりましたか？

市内在住で現在働いている方を対象としたアンケートの結果、約9割の人が「変わった」と回答。



Q. 人とのつながりを感じた出来事は？

友人たちと誕生日プレゼントを贈り合った。会えることに絆を感じた。(21歳男性)

子どもの学校が休校になったとき、職場が協力的で助かった。(34歳女性)

11月11日現在
国内感染者数 11万156人
県内感染者数 9604人



テイクアウトをよくするようになり、お店の人に感謝される。笑顔を見ると私もうれしい。(40歳女性)

20年以上前、娘が高校生の時に一緒にPTA役員をした方が、洋裁が趣味とこので、わざわざ私にも素敵な手作りのマスクを送ってくれました。(64歳女性)

福祉施設に入居している母に会えていない(51歳男性)

マスクや、手指の消毒を気にする生活になった。食事会や集まりが減り、とても窮屈な生活になった。(47歳女性)

休校中、両親共に仕事があったので朝早くから夜遅くまでいない日もあり、寂しかった。(13歳女性)

Q. どんな点が変わりましたか？

派遣切りされた。新しい仕事も長期の仕事がなく、短期で行くようになった。(46歳女性)

時差出勤やフリータイム出勤が認められるようになった。今後も定着してほしい。(45歳女性)

コミュニケーションの機会が減った。人と話すのが下手になったように感じる。(19歳女性)

主人の出勤が減り、テレワークができない工場勤務なのでお金も入らず、収入が激減しました。子どもが3人いて、とにかく家計が大変です。(46歳女性)

思い付かない。それほど非日常だった。(18歳男性)

Q. 変わらなかったことはありますか？

電話でも友達とおしゃべりはいつも通りで、話が尽きなかった。(18歳女性)

夫婦そろってテレワークができない仕事。休日の外食は減ったが、平日は変わらない。(44歳女性)

おうち時間の充実を工夫するようになった。部屋を模様替えしたり、「たこ焼きパーティー」や「焼き肉パーティー」などと名付けて家族との食事を楽しむようになった。(37歳女性)

入学してすぐオンライン授業になり、友達をつくるのが大変だった。できたとしても浅い関係で、本音を言える人が周りにいない。(19歳女性)

病院に勤務しているため、コロナ関連業務があり毎日残業。疲れている状態から脱出できるのか、不安です。(57歳女性)

仕事がなくなり、いまだに決まらない。生活が苦しい。(54歳女性)

学校に行かないので人と会う機会がとて減りました。勉強はしていますが、自分が学生という感じがしないうです。(20歳男性)

好きなアーティストのライブが中止になった。(18歳女性)

夫婦で共働きのため、オンライン授業で家にいる息子が夕飯の準備をしてくれるようになった。(52歳女性)

旅行に一切行っていない。Go Toトラベルで12月に予約を取ったが、行っていいのかわりに心配。(48歳)

閉塞感で気持ちがへこむ。(70歳女性)

(国内の感染者数) 10万人

5万人



1月 16日 国内初の感染者を確認

2月 1日 対策本部会議を開催

2月 2日 除菌水の配布

3月 4日 小・中学校の休校を要請

3月 7日 緊急事態宣言により閑散とする市街

3月 13日 国内初の死亡者を確認

3月 24日 東京オリンピック・パラリンピックの延期を発表

3月 27日 小・中学校の休校を要請

4月 1日 市民安全対策本部設置

4月 1日 公民館で除菌水を配布

4月 7日 市内の感染症患者を6床から22床に拡大

4月 10日 あつぎテイクアウト大作戦、厚木エール館で店舗を応援

4月 18日 市内の感染者1万人超

4月 21日 市内病棟の感染症患者を6床から22床に拡大

4月 21日 医師会がPCR検査センターを開設

4月 27日 緊急事態宣言解除

4月 27日 公共施設を順次再開

4月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

5月 1日 特別定額給付金申請受付開始

5月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

5月 25日 小・中学校が分散登校で再開

5月 25日 緊急事態宣言解除

5月 27日 公共施設を順次再開

5月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

5月 31日 市内の感染者1万人超

6月 1日 特別定額給付金申請受付開始

6月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

6月 25日 小・中学校が分散登校で再開

6月 25日 緊急事態宣言解除

6月 27日 公共施設を順次再開

6月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

6月 31日 市内の感染者1万人超

7月 1日 特別定額給付金申請受付開始

7月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

7月 25日 小・中学校が分散登校で再開

7月 25日 緊急事態宣言解除

7月 27日 公共施設を順次再開

7月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

7月 31日 市内の感染者1万人超

8月 1日 特別定額給付金申請受付開始

8月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

8月 25日 小・中学校が分散登校で再開

8月 25日 緊急事態宣言解除

8月 27日 公共施設を順次再開

8月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

8月 31日 市内の感染者1万人超

9月 1日 特別定額給付金申請受付開始

9月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

9月 25日 小・中学校が分散登校で再開

9月 25日 緊急事態宣言解除

9月 27日 公共施設を順次再開

9月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

9月 31日 市内の感染者1万人超

10月 1日 特別定額給付金申請受付開始

10月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

10月 25日 小・中学校が分散登校で再開

10月 25日 緊急事態宣言解除

10月 27日 公共施設を順次再開

10月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

10月 31日 市内の感染者1万人超

11月 1日 特別定額給付金申請受付開始

11月 1日 市内の事業者が花火を打ち上げ

11月 25日 小・中学校が分散登校で再開

11月 25日 緊急事態宣言解除

11月 27日 公共施設を順次再開

11月 29日 入暮らしの学生に5万円を補助

11月 31日 市内の感染者1万人超



浮かび上がった課題

誰かのために できること

大変な時に、助けを求めるのは難しい

シングルマザー・及川由美子さん(45・仮名)

「助けて」と口に出したら、自分が崩れてしまいそうな気がした。2人の息子と暮らす一人親の及川さんは、子どもが幼かった当時のことをそう振り返る。

当時、夫は夜勤が多く、家事も育児も頼れなかった。自分もフルタイムで働きながら、一人で息子2人を世話する日々。とにかく時間に追われていた。平日は5時30分に起き、7時15分には次男を保育園へ送って出勤。登校時間の間まで、小学1年の長男を家に一人にするのが心苦しかった。夜は夕食を取った後子どもを入浴させ、寝かしつけてからまとめて家事をする。時間のすれ違いもあり、10年前に離婚を決め、子どもを引き取った。「経済的に親にも頼れず、一人で生活を守るしかなかった。意地になっていたのもあるのかもしれない。どんなに大変でも自分の決断だからと、誰にも弱音は吐けなかった。

今、もし当時の自分だったらと想像する。子どもとの生活のために働かなければいけない。感染のリスクがあっても、保育施設に子どもを預けなければいけない。感染対策に神経をとがらせながら一人で家族を支える不安は、今よりもっと大きかっただろう。「一人で抱え込むしんどさを知っているから、似た境遇の人と出会った時は、話を丁寧に聞いたり、自分の経験を話したりするようにし

ている。今振り返ると、成り行きで参加し始めた地域コミュニティが、及川さんにとってとはとても大切な居場所になっていったという。離婚してから少し経った頃、及川さんは青少年健全育成会の役員を務めることになった。最初は面倒だったが、公民館行事や地域活動などへの参加を続けていくうちに、人との輪が少しずつ広がっていった。近所の子どもやその親、自治会の人、学校の先生。「外に出ていろいろな人と話す、大変なのは自分だけじゃないんだと気が軽くなった。状況を变える策が見つからなくても、誰かと一緒に過ごし共感し合うだけで、張りつめた気持ちが少し休まる気がした。

つらい時に助けを求める難しさを実感しているからこそ、新しい人に寄り添うことを大切にしている及川さん。もし昔の自分に会えるなら「一生懸命やっていたら、子どもは見えてくれている。いつか『子育てしてよかった』と思う時が来るよ」と声を掛けたい。

2人の息子は今年、24歳と19歳になった。及川さんは「コロナが落ちていいたら、3人で行ったことのない海外へ行ってみたい。英語を勉強している息子の腕試しも兼ねて」と笑顔を見せた。迷うこともあったけれど、今笑っていられるから後悔はない。一歩一歩踏みしめながら、及川さんは明るい方へと歩いている。



「私立高校に入学を決めた息子に謝られたことが忘れられない。その気持ちがあれば頑張れると思った」と話す及川さん

小さなやり取りから信頼をつくる

無料学習塾運営・小室善昭さん(58・妻田東)



生徒は「親身になってくれて分かりやすい。勉強が楽しくなった」と笑顔を見せていた

活動を始めたい方は ●ボランティア相談●
活動を始めた・活動に興味がある方の相談を受け付けます。
☎市民協働推進課 ☎225-2141



講師もボランティアとして来ている

「まずこの数をx、こつちをyと置いてみようか」「あつ、分かった。夜の7時、市内の公共施設。問題集に向かう塾生に寄り添い、時折つまづくと助言をする。小室さんは、学習塾を営む傍ら、経済的に苦しい家庭や学校に通えない生徒などに、無料で勉強を教えている。

もともと子どもが大好きだった小室さん。会社員としてテレビゲーム制作に携わっていたが、子どもの将来に直結する仕事をしたいという思いで退職し、学習塾を開いた。ある時報道で、経済的な事情などで勉強したくてもできない子どもがいると知り、いてもたってもいられなくなった。「勉強は人生を左右する。何とかしなくては。そんな思いで2016年、無料学習塾「ねこの手」

を始めた。今では週に1回、十数人の生徒が通い、おのおの自分の計画を立てて学んでいる。小室さんは「余裕のある家庭の子が塾に通うのが当たり前になれば、そうでない子との差ができる。家庭の経済事情に関係なく、平等に学べる機会を作りたい」と力を込める。

自粛期間もオンラインで授業を続けられたことで、遠隔で教えることに手応えを感じた小室さん。9月から、不登校の生徒などに向けオンライン授業を始めることになった。自身の子どもの学校に行けない時期があったという小室さんは「悩む気持ちではなく、親子だけで焦ってうまくいかないことがあるから、第三者と関わりを持つ方がいい」と考える。コロナは、人と人との

思いやりは循環する

フードバンクあつぎ



5月の配布の様子。4回の配布で市内の学生などおよそ900人が受け取った

「コロナでアルバイトがなくなっても助かった」。緊急事態宣言が出された5月、「フードバンクあつぎ」から食品提供を受けた学生はそう言う。安心して顔をほころばせた。フードバンクとは、食品ロスを集め、必要の人に配る取り組み。2019年から、市民協働提案事業(下記参照)として活動している。



仕分けを手伝う榎谷さん(右)

熱意に呼応するように、つながった縁がある。東京農業大学4年の榎谷準也さん(21・戸室)は、コロナをきっかけにフードバンクの活動を手伝うようになった。「収入が減り苦しい生活をしている同級生たちを見て、何かできないかと思った」と話す榎谷さん。フードバンクの取り組みを紹介され、ぜひ手伝いたいと申し出た。そこで目にしたのは、倉庫いっぱい食品。「顔も知らない

コロナがもたらした非日常は、元来社会が持つ課題を浮かび上がらせた。私たちの身近にも、打ち明けづらい悩みを抱える人や、それを支える人がいる。人との触れ合いを持ちづらくなった今、私たちが誰かのためにできることは何だろう。

市民の声 voice

6年間大事に働いていたお店が閉店し、無職になった。シングルマザーで3人の子どもがおり、先の見えない不安な毎日を過ごしている。(39歳女性)

アルバイトに入れず、一人暮らしなので生活が苦しい。国や市からの給付金がありがたかったが、また支援がないか期待せざるをえない状況にある。(21歳男性)

在宅勤務が主流になり、通勤している事業所が閉所されることになった。働き方が変わり、収入が減った。(57歳)

今、困っている方へ ●生活困窮者自立支援制度●

生活に困っている方向けの相談窓口です。支援員が話を聞き、自立に向けて支援します。
対象 生活保護を利用していない人で、生活に困り事がある人やその家族など
内容 働きたくても働けない、生活が苦しい、社会との関わりに不安があるなど

☎福祉総務課 ☎225-2895

●市民協働提案

市民活動団体と市が共
を解決するための事業を
です。例年5月に募集し

仕組み 書類審査や企
採択されると経費負担
が最長3年間受けられ
経費負担限度額 160~
実施例 フードバンク、
地域住民乗り合いバス

☎市民協働推進課

事業●

に地域の課題
実施する制度
実施します。
画説明を経て
など市の支援
200万円
子ども食堂、
など
☎225-2141

フードバンクの活動に協力を

家庭で余った食品を募集し、
必要な家庭に無償で提供します。

日時 12月16日 10~15時
場所 あつぎ市民交流プラザ
対象 賞味期限まで2カ月以上
あり、常温保存で
開封の食品

☎当日直接会場へ。
毎月第3水曜日に回収して(10~16時)
☎Heart34 ☎220-5088

僕たちのために、厚意を寄せてくれたんだ。他の学生たちにも声を掛け、手伝える人を募った。「市内の学生や後輩たちにもこの活動が広がって、長く続けばいいな」と笑う。誰かに厚意を送る人、届ける人がいる。これまでのように人と接点を持ってない今だからこそ、他人を気遣う気持ちで大切にしたい。「感謝を忘れず、いつか学生みんなが地域に恩返しできたら」。フードバンクに集まった思いやりは循環し、支え合いの輪が広がっていく。



高齢者の自宅を訪ねる宮本さん(左)と若原ツヤ子さん

小鮎地区民生委員・児童委員

民生委員は、高齢者や障がいがある人、一人親家庭などを身近な場所から見守っている。感染症との対峙を経て、改めて自分たちの役割を見つめ直す委員の姿を追った。

「こんにちは。元気にしていますか。小鮎地区民生委員の宮本隆さん(69・飯山)が声を掛けると、80歳代の男性はいつものように手を上げて玄関先で宮本さんたちを迎えた。「奥さんを亡くしてから一人で暮らされている外国籍の方で、時々様子を見に来ている。顔を合わせるのを大事にしているが、今年は思うようには活動できていない。」

民生委員は、国から委嘱を受けるとの連携も欠かせない。感染症は、こうした組織や人との距離を遠ざけた。関係機関との会議や教室などは休止、来所相談や訪問も最低限にせざるを得なかった。センターの事務所も仕切りを作り、2班体制で接触を避けながら業務に当たった。「センターに寄せられる相談件数は増えていて、一人でも感染すれば業務を続けられないという緊張感があった。書面だけで情報を共有する難しさ、他の機関との連携にも課題を感じた」と篠原さんは振り返る。



感染に気を付けながらの活動が続く

地域の困り事は民生委員・児童委員に

住民に最も身近な福祉の相談役として活動しています。気軽に相談してください。
内容 高齢者や障がいのある方の見守り、子どもへの声掛け、介護・子育てなどの相談、情報提供
※お住まいの地域の担当民生委員は、福祉総務課に問い合わせください。
☎福祉総務課☎225-2200

「いざという時のために、日常、平時の活動が大事」。コロナ禍を経て、改めてその思いを強くしたという宮本さん「今だからこそできることを考えて活動したい」と朗らかな表情を見せた。

見えてきた、大切なこと

ほどけない結び目をつくる

不要不急の外出自粛、人との距離の確保一。制約の多い日々の中でも、支えを必要とする人のために無くせない物事がある。感染への注意を払いながら、それぞれの立場で動き続けた人たち。その姿から、これからの社会に必要なものを見つめてみた。

市民の声 voice

8月末から、どのように工夫すれば地域事業が行えるかみんなで話し合った。地域住民の要望に応えるように考えられるか?何をしたらいいのか?みんなの気持ちが共有できた。(60歳女性)

知的障がい者のグループホームで仕事をしています。地域は違っていても、同じように地域生活を支えている人は多くいるので、孤独を感じることなく仕事に従事できます。(46歳男性)

近所のおばあちゃんの腰の具合が悪くなってしまったため、買い物代行したら感謝された。近所の人たちもマスクをしながら差し入れをしていて、絆を感じた。(35歳女性)

市のフードバンクの皆さんが食品を無償で提供してくれた。学生のことは忘れられていると思っていたが、そうではないと感じることができた。本当に感謝しています。(22歳女性)

「認識」に、優しく話し掛けましょう。11月、荻野公民館の一室では、一人歩き高齢者への声掛け訓練が開催されていた。地域で高齢者が安心して過ごせる仕組みを作るため、認知症サポーター養成講座の受講者を集めてセンターが企画した。感染症の影響でなかなか動けなかったけれど、ようやく始められた。センターの管理者・篠原千代さん(41)はそう目を細めた。センターでは、多岐にわたる相談や支援業務に対応するため、各種専門家6人が協力して事業に当たっている(右下欄参照)。住民の生委員、医療・福祉施設、警察な

どとの連携も欠かせない。感染症は、こうした組織や人との距離を遠ざけた。関係機関との会議や教室などは休止、来所相談や訪問も最低限にせざるを得なかった。センターの事務所も仕切りを作り、2班体制で接触を避けながら業務に当たった。「センターに寄せられる相談件数は増えていて、一人でも感染すれば業務を続けられないという緊張感があった。書面だけで情報を共有する難しさ、他の機関との連携にも課題を感じた」と篠原さんは振り返る。

しずつ休止していた業務を再開させていった。地域の居場所作りとカフェでは、再開の日に30分前から姿を見せる住民もいた。「感染症を経験して、顔が見える大切さを改めて痛感した」と話す篠原さん。「住民の皆さん、スタッフなど良い関係を作りたい」。篠原さんは、今日も住民やスタッフたちとつながり、地域の声に向き合っている。

一人歩き高齢者への声掛け訓練の様子



利用者と作業する伊田さん(左)

「玉川地区の皆さんに作ってから、市内の企業や他地区からも注文を頂けるようになった」と、所長の伊田弘弘さん(43)は笑みを浮かべた。4月頃、玉川地区の自治会連絡協議会では、市の健康増進事業で得た賞金の使

障がい者就労施設で提供できる製品・サービス

市民の皆さんや、事業者の方も購入・発注できます。
内容 布製品(マスク他)、焼き菓子、弁当、印刷、クリーニング、除草など
※詳しくは市HPに掲載
☎障がい福祉課☎225-2225



声掛け訓練の参加者に声を掛ける篠原さん(右)

荻野地域包括支援センター

地域で暮らす高齢者を支える地域包括支援センター。コロナ禍で見えてきたのは、顔を見てつながる大切さだった。

地域包括支援センターの役割

高齢者などが、住み慣れた地域で暮らすための相談窓口。市内10カ所に設置され、主任ケアマネジャー、保健師(看護師)、社会福祉士が相談に応じています。
内容 地域住民の健康、生活、財産、権利などの相談に市や介護・医療・福祉の関係団体と連携して対応
※各センターの連絡先などは市HPに掲載
☎地域包括ケア推進担当☎225-2047

玉川地区自治会×障がい者就労施設

5月下旬、玉川地区の高齢者に自治会から布製のマスクが届けられた。感染症をきっかけに生まれた、地域の縁にスポットを当てた。

「秋風が吹き込む工房に、ミシンの規則的な音が響く。縫い上がった布に、耳ひもを通す利用者たち。玉川のほとりにある障がい者就労施設・工房小野橋では、受注したマスクの生産が行われていた。玉川地区の皆さんに作ってから、市内の企業や他地区からも注文を頂けるようになった」と、所長の伊田弘弘さん(43)は笑みを浮かべた。4月頃、玉川地区の自治会連絡協議会では、市の健康増進事業で得た賞金の使



マスクを渡す加藤自治会長(左)

5大学連携 メッセージ 今だから、できること。



- 1 オンライン上で話し合った学生たち
- 2 各大学から2人ずつの学生が参加
- 3 メッセージを入れたポスターを作成し多くの学生に知らせる

厚木市大学連携・協働 検索

☎企画政策課☎225-2450

神奈川工科大学、東京農業大学、東京工芸大学、松蔭大学、湘北短期大学の学生が自分たちができることをまとめ、メッセージとして共有しました。

- あぶない! コロナは急に止まらない! 行動範囲が広い大学生こそ、より感染症拡大に気を付け、ルールを守り行動を見直す。
- コロナ禍でも楽しめることを見つけよう 料理を覚えたり、キャンプなどの屋外活動を取り入れたりと生活を豊かにする。
- 社会が変わったのなら... 私たちはなにを変える? マスク着用、外出自粛、経済を回す動きなど、社会が刻々と変化中、できることを考える。

大学生の活動の活発さはまさに活力を与える一方、感染源にもなりかねません。話し合いの中で、注意が緩んでいるという声もあり、大学生の私たちがもう一度気を引き締めるべきと考えました。この機会に得た他校とのつながりを生かして、自分たちができる発信をしていきたいです。



話し合いに参加した東京農業大学 上條 薫さん(20)

思いに応える関係を

つながりの本質とは

2011年の東日本大震災をきっかけに、災害時の人と人とのつながりを研究し、つながることの大切さを伝えてきました。しかしコロナ禍で状況は一変し、感染の拡大を防ぐために密閉、密集、密接を避けた生活が呼び掛けられ、会うことも難しくなりました。

コロナの影響で顔を合わせる機会が減ったことから、つながりは希薄化していると言われていきます。しかし、つながりの本質とは、直接会って顔を合わせる必要はないのでしょうか。

私の大学でも、コロナの影響で生活が困窮している学生を支援するために、SNSを使って食品の提供を呼び掛け



天野 和彦 さん (61)
プロフィール 福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任教授。市主催の地域ぐるみ家庭教育支援フォーラムで講演。

市民の声 voice

外出の機会が減り、近所の人と会うことが少なくなってしまった。ごみ捨てなどですれ違う際に、マスク越しでもあいさつをすることで安心感があった。(48歳女性)

マスクが買いたくても見つからない時に、近所の方から売っている店を教えてもらい、人とのつながりを感じた。(24歳女性)

遠くに遊びに行けず、近場で用事を済ませるようになり、近所の方と話す機会が増えた。(19歳男性)

コミュニティーカフェを再開してお年寄りに喜ばれた。多くの人がつながりを求めていると感じた。(69歳男性)

都内に住む人が帰省した際、その人を誹謗中傷する出来事がニュースとなりました。実態のよく分からない感染症を恐れる気持ちの人が疑心暗鬼にさせ、他人を攻撃したように思います。しかし、私たちが戦うのは感染症であって人間ではありません。恐怖心から人を傷つけることは、感染症と同じくらい恐ろしいかもしれません。感染症を「正しく知り・恐れ・予防する」ことが大切です。こんな時だからこそ相手を思うつながりを大切にして、みんながこの危機を乗り越えましょう。

みんなで乗り越える

ました。全国からお米やカレーなど多くの食品が集まり、一緒に応援のメッセージも送られてきました。このとき、学生を思いやる言葉の数々に、つながりの本質を垣間見た気がしました。つながりとは、思いに応える関係のこと。オンライン通話も直接会って話すことも、同じつながるための手段です。会えない状況はつらいかもしれませんが、それぞれに合った手段を活用し、互いの思いに応えるつながりを途絶えないようにすることが大切です。



つながる 大切さ

感染症により、私たちの生活は変わった。非日常を過ごした皆さんの姿や声から見てきたのは、変わらないつながりの大切さ。先の見えない不安の中でも、誰かと心を強く結び、つながっていたい。

広報あつぎ 連動特別展示

疫病を乗り越えて

—今だから知りたい150年前の疫病対策—

私たちの祖先も感染症と戦い、乗り越えてきました。祖先がどのように疫病と対峙したのか、古い資料から読み解いてみませんか。

あつぎ郷土博物館 ☎225-2515

日時 12月1～23日

場所 あつぎ郷土博物館

展示物 金毘羅刷物や由来記など

あつぎ 元気Wave
12/1～CATVで放送

赤は魔よけの色

医療が発達していない時代、感染症はえたいの知れないものでした。古くから赤色は魔よけや厄よけの意味があると信じられ、病や悪霊など目に見えない敵と戦う際に使われてきました。諸説ありますが、道祖神の頭巾やお祝いで食べる赤飯も赤色です。展示では、人々が神仏に祈願したことが分かる「鳶尾山金毘羅子世羅天由来記」や今でも配られるお札などが見られます。先祖が感染症と戦った記録を見てみませんか。



あつぎ郷土博物館 館長 大野 一郎



市内にある道祖神などの文化財情報を掲載する冊子「独案内」

詳しくはこちら▼



忘れてはいけない心のつながり

市自治会連絡協議会 会長 山口 泉さん (70・温水)



感染症の影響で、祭りの中止や総会を書面で実施するなど、例年とは違う自治会活動を強いられています。地域の皆さんからは、全ての活動を中止にするのではなく、感染対策をした上での再開を望む声が多く届いています。活動できないからこそ、自治会の必要性を皆さんが感じているのだと思います。

これからも、人との距離を保たなければならない状況が続くでしょう。だからこそ、忘れてはならないのが心のつながりではないでしょうか。今後は、コロナ禍で感じた人との絆を大切にして、災害時の対応や高齢者の孤立を防ぐ取り組みなどを進め、新しい形で自治会活動を進めていきたいと思っています。

住みよい地域をみんなの手で 自治会に入りませんか

自治会は、皆さんに一番身近な地域の集まりです。同じ地域に住む皆さんと課題や意見を共有し、住みよいまちをつくりませんか。

市民協働推進課 ☎225-2101



大規模災害に備えて 厚木中央公園などで総合防災訓練を実施



避難所で3密を避けるための方法を確認

10月18日に小学校など市内127カ所で総合防災訓練を実施し、約9千人が発災時の行動を確認しました。今年度の訓練は、感染症対策に重点を置いて実施。避難所で身体的距離を確保するためのテントの設置訓練などに取り組みました。厚木第二小学校避難所運営委員長の宮田幸紀さん(75・旭町)は「感染症対策を意識した新たな対策の必要性を感じた」と話していました。

この他、厚木中央公園では、10月に災害対応などで包括連携協定を結んだスカイジョブ合同会社と消防部隊が合同訓練を実施。ドローンを使った救助訓練に取り組み、連携を確認しました。

市南部に新たな産業拠点を 酒井土地地区画整理事業の起工式を開催

市が支援している酒井土地地区画整理事業の起工式が、10月に開催されました。土地区画整理組合の高橋功雄理事長や小林市長、施工企業の関係者など約50人が出席し、工事の安全と円滑な進行為を祈念しました。



起工式でくわ入れする小林市長たち

事業の対象は、酒井、下津古久、愛甲などの地区にまたがる約27・6畝。周辺に東名高速厚木インターチェンジ(IC)や新東名高速厚木南ICがあり、交通の便に恵まれた地域です。高橋理事長は「交通便利性を生かした産業拠点の形成を目指し、周辺への影響に配慮しながら工事を進めていきたい」と意気込みを語りました。



電柱探しで楽しく運動 サーチウオークの催しを初開催

11月、街中にある電柱を探しながら運動できる「あつぎサーチウオークチャレンジ」が厚木中央公園周辺で開催され、初日には150人が競技を楽しみました。



問題を解きながら目標の電柱を探す参加者たち

サーチウオークは、地図に示された情報を基に目標の電柱を探し出して得点を競うウォーキング競技。新型コロナウイルス感染症の影響でスポーツ大会や催しが中止となる中、屋外で3密を避けながら運動に親しめるイベントとして開催しました。

家族で参加した山室暁さん(12・岡津古久)は「電柱を探すのに頭を使いながら、楽しく体を動かせた。また参加したい」と笑顔で浮かべていました。

修学旅行の代わりに思い出の花火を 北小学校で6年生応援打ち上げ花火大会を実施

子どもたちは「こんなに近くで花火を見たのは初めて」「すごい迫力でとてもきれいだった」「最高の思い出ができた」などうれしそうに話していました。



子どもたちは学校の屋上で花火を鑑賞

新型コロナウイルス感染症の影響で修学旅行が中止となった6年生を応援するために、北小学校の校庭で11月5日に花火大会が開かれました。6年生65人が、夜空を彩る50発の大輪を目に焼き付けました。イベントは、学校とPTA、地域住民の皆さんが費用を出し合い、地元花火製造業者の協力を得て実現しました。昼間には修学旅行先で体験する予定だった益子焼の絵付けを行い、花火の前には星空観察会と肝試し感覚の学校探検も実施しました。

ATSUGI X NEW ZEALAND ホストタウン通信

ニュージーランド NZと厚木の食材を使った レシピを発信

市では、NZの食文化に親しみを持ってもらうために、厚木とNZの食材を使った料理の作り方を料理レシピ検索サイト「クックパッド」で発信しています。パイやハンバーガーなどNZでおなじみの料理に、厚木名物のとん漬けや市内産の卵やジャガイモなどの食材を加えてオリジナル料理が作れます。



NZで定番のラムチョップを使った料理も掲載

レシピはどれも短時間で作れる簡単なものばかりです。自宅で気軽にNZ料理を味わってみませんか。

クックパッドの市公式アカウントはこちら



東京オリンピック・パラリンピック(東京五輪)に向けて、ホストタウンとなったニュージーランドとの交流事業を紹介します。

ひとまち 元気

市長 小林 幸良



全15地区を訪問

皆さんとお会いすることができて、身が引き締まる思いでした。地域の皆さんが肌で感じていることや課題をしっかりとまちづくりに生かすため、現在、来年の予算編成に全力で当たっています。感染症との戦いはこれからも続きます。これまでのやり方にとらわれない、新しい発想で市政運営に当たってほしいと思っています。皆さんと築き上げてきたつながりを糧に、市民協働でまちを盛り上げていきましょう。

Zoom Up

12月から市役所の一部業務を自動化

RPA導入でサービスを充実

少子高齢化が進み働き手が減り続ける中、行政サービスの維持・向上のためには業務の効率化が欠かせません。市では、単純な事務作業や反復作業をロボットで自動化する技術「RPA（ロボット・プロセス・オートメーション）」を一部業務で導入し、12月から運用を始めます。

国内では、労働力の中核となる15～64歳の人口が、1995年をピークに年々減っています。市では、業務を効率化し、質の高いサービスを提供し続けるために、RPAの導入を決定。データ入力や定型業務をロボットが補い、職員が市民の皆さんの応対や創造性の高い業務に当たれる環境を整えます。

自動化で約450時間を削減

RPAは、業務の判断基準やルールをコンピューターに記憶させ自動的に



単純作業を自動化してサービスの質をさらに高める

繰り返す仕組みです。判断と処理を一括して担うAI（人工知能）とは異なり、定期的な反復作業に適しています。RPAを導入するのは、退職などで住民税の納付方法を切り替える際に必要な市民税特別徴収異動届の入力業務です（左下欄参照）。税システムへの入力作業を年間約9千件自動化し、約450時間を削減します。例年、異動届の提出は退職や転勤が多い3～6月に集中しているため、確定申告の対応などの時期と重なっています。RPAの導入で、こうした業務の負担が軽減

今回のRPA導入を皮切りに、市ではその他の業務でも自動化の検討を進めています。各種証明書を発行する際に受け付けている手書きの申請書や、業務に必要な書類をスキャナーで読み取り、情報を電子データ化できる技術「AI-OCR」の活用も検討。RPAと組み合わせ、紙に書かれた情報を自動で電子ファイルにまとめられる仕組みを作り、さらなる効率化を目指します。業務の効率化は、サービスの維持・向上だけでなく、職員の働き方改革にもつながります。今後、新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえ、各種申請のデジタル化にも取り組む必要があります。人が担うべき業務とすみ分けながら、最先端の技術を取り入れ、市民の皆さんにより良いサービスを届けたいと思います。

行政経営課 ☎25-2160

デジタル化で住みよいまち

され、より充実したサービスの提供にもつながります。通信技術に精通する玉川大学の安達和年講師（62・妻田南）は「RPAは作業が正確でスピードも速い。活用できれば別の業務に時間を充てられるようになり、市民サービスの向上につながる」と期待を込めます。

RPAの導入

業務の効率化 → 質の高いサービス
生産性の向上 → 働き方改革

12月導入 市民税特別徴収異動届の入力業務



RPA 入力業務を自動化

- ☑作業を正確に遂行
- ☑24時間365日稼働可能
- ☑作業スピードが向上

税システムへの入力を自動化
年間約9千件の入力作業を自動化し、約450時間を削減

デジタル化への柔軟な対応を
玉川大学 講師 安達 和年さん (62・妻田南)

一人一人の生産性を上げるには、業務の効率化が欠かせません。コンピューターの性能が飛躍的に進歩する中、自動化による効率化を考えるのは必然と言えるでしょう。はんこ廃止の議論もあるように、窓口業務など住民に直接関わるサービスも、今後デジタル化が加速していくことが予想されます。最新技術をうまく取り入れて、サービス向上のための業務改善につなげてほしいと思います。

今後検討 手書きの帳票を電子データ化する技術「AI-OCR」の導入

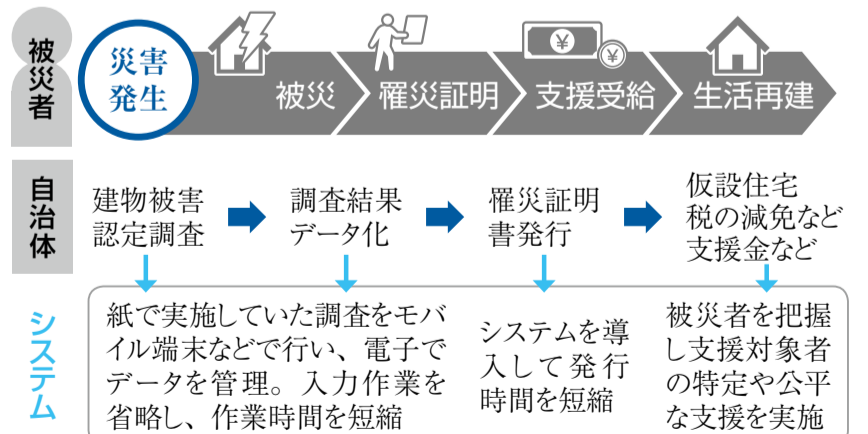
紙の申請書の内容をパソコンに入力して電子データにする作業を自動化し、効率化。

災害時の迅速な市民生活の復興を支援

被災者生活再建支援システムを整備

大規模災害時には、被災者への迅速な支援金の給付や仮設住宅の提供などが欠かせません。市では、支援に必要な被害認定調査や罹災証明書の発行などを素早くするためにシステムを導入しました。

☎危機管理課 ☎225-2190



被災者の声

- ☑支援を受けるまでの期間が短縮
- ☑支援の申請をしていない人を把握でき、市からお知らせが可能に
- ☑今後、マイナンバー制度との連携で事務手続きの簡略化を予定

支援が早く欲しい
自分が支援に該当するかわからない
手続きが面倒そう

タウンガイド

12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

1月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

☎=申し込み ☎=問い合わせ ☎=電話番号
 ☎=ファクス番号 ✉=Eメール HP=ホームページ
 ○=講座予約システム(○印の番号で、ウェブ上から詳しい情報を確認できます。「○印」と記されたものは、申し込み可) 市役所への郵便物は「〒243-8511〇〇課」で届きます。

あつぎのしゃしん。

「荻野運動公園のコスモス」
 #11月1日撮影
 #秋桜
 #花言葉は調和
 #niceatsugi
 広報課公式Instagramで公開中




新型コロナウイルス感染症に関する県の相談窓口

発熱等診療予約センター

発熱などの症状があり、かかりつけ医で受診できない方(毎日9~21時)
 ☎(0570)048914

新型コロナウイルス感染症専用ダイヤル

感染の不安のある方、健康・医療のことなど(24時間対応)
 ☎(0570)056774

新型コロナウイルスの影響で掲載の催しが中止となる場合や、利用に制限のある施設があります。市HPで随時お知らせします。

あそぼう！まなぼう！ まめの木タイム

12月8日、11~12時。森の里児童館。発達に関する講座や親子触れ合い遊びなど。乳幼児と保護者10組。無料。☎当日直接会場へ。☎療育相談センター☎225-2252。

救急救命講習会

■応急手当普通救命講習会

1月16日、9時~。市内在住勤在学の中学生以上15人。☎1941009

■小児・乳児への応急手当普通救命講習会

1月30日、9時~。市内在住勤在学の中学生以上8人。託児あり(1歳以上3人)。☎1941015

いずれも各回180分。消防本部。無料。応急手当の必要性、心肺蘇生法や自動体外式除細動器(AED)の取り扱いなど。☎12月1~10日に救急救命課☎223-9365へ。抽選。

後期危険物取扱者保安講習会

第1種(給油取扱所)=1月27日、9時40分。第3種(一般)=①1月27日、13時20分~。2月1日、②9時40分~③13時20分~。各回180分。文化会館。危険物関係法令や危険物災害対策、施設の安全管理などの講習。危険物取扱者免状を持ち、危険物を取り扱う方各回150人。4700円(県収入証紙代)。☎消防本部や各分署などにある申請書を、1月7日(消印有効)までに〒238-0011横須賀市米が浜通1-7-2-204県危険物安全協会連合会へ。先着

順。☎予防課☎223-9369。

ドローン体験講習会

2月5日、13時30分~16時。保健福祉センター。プロパイロットによるデモフライト、ドローン操縦体験、ドローンに関する法律や安全な操作方法の講義。市内企業関係者10人。無料。☎電話またはファクスに講習会名、住所(企業の場合は所在地)、氏名、事業所名、電話・ファクス番号を書き、12月7日から産業振興課☎225-2831・FAX223-7875へ。先着順。☎2036005

2021年度小・中学校体育館およびグラウンド開放団体登録の受け付け

《対象》市内在住勤在学の方10人以上で構成し、年間を通して定期的に使用する非営利のスポーツ・レクリエーション団体《使用施設》体育館=1団体1校、グラウンド=1団体2校まで。開放時間など詳しくは市HPに掲載。☎スポーツ推進課や公民館・市HPにある申請書に必要事項を書き、郵送で12月28日(必着)までにスポーツ推進課☎225-2530へ。申請後、調整会議に出席し使用の可否と使用日時を決定。

やさしい円満相続セミナー

12月9日、14時~15時30分。あつぎ市民交流プラザ。生前の「争族」対策を学ぶ。個別相談あり(要予約)。市内在住の方。無料。☎あつぎ相続くらし支援センター☎0120-210-129へ。詳しくはセンターHPに掲載。

ホット インターネットモニターからの意見を紹介

いメール Hot E-Mail

インターネットモニター募集
 厚木市インターネットモニター 検索

☎広報課☎225-2043

11月1日号「広報あつぎ」を読んで

◆厚木の魅力をSNSで共有できることは素晴らしい/20代女性 ◆コミュニティ交通の整備が進み誰もが住みやすいまちになってほしい/30代男性 ◆電子商品券を購入して飲食店を応援したい/60代男性 ◆自分にできることから子育て支援を始めたい/70代男性 ◆子育て支援にはさまざまな形があることが知れて良かった/40代女性 ◆友好都市と連携した企画を実施してくれたらうれしい/50代女性


12月3~9日 障害者週間

あつぎ 元気Wave 12/1~CATVで放送

誰もが住みやすいまちになるよう、障がいへの理解を深めましょう。

■ヘルプマーク・カードへの理解を

配慮や援助が必要な方が着けているマークです。席を譲る、困っていたら声を掛けるなどの配慮をお願いします。



■手作り製品展示・即売会

障がいがある方が作った製品を販売します。

《日時》12月7~9日 10~14時
 《場所》市役所本庁舎
 《販売品》ポストカード、アクセサリーなど

※製品は、厚木市まるごとショップ「あつまる」でも常時販売しています。

ガイドブックを活用

障がいの特性や支え方などをまとめたガイドブックを配布しています。



市HPにも掲載

☎障がい福祉課☎225-2221

12月11~20日は年末の交通事故防止運動

年末は交通量や飲酒の機会が増え、交通事故が増えます。交通ルールの遵守と交通マナーの向上に取り組む、事故を防ぎましょう。

■交通部隊出発式

12月12日、13時30分~14時。厚木中央公園。県警音楽隊によるドリル演技など。12時~12時30分に白バイ・パトカーと写真を撮れるふれあいタイムあり。☎交通安全課☎225-2760。



斎場施設見学会

12月18日、10時30分~12時。市斎場。施設見学と葬儀の説明。定員30人。無料。☎12月1~17日に市斎場☎281-8595へ。先着順。

12月4~10日は人権週間

「人権」は、誰もが生まれながらに持っている権利であり、尊重されるべきものです。この機会に人権の大切さを考えてみましょう。☎市民協働推進課☎225-2215。

社会保険料控除の対象となる保険料額の通知

2020年中に納めた①国民健康保険料②後期高齢者医療保険料③介

護保険料は、所得税や市・県民税の申告時に社会保険料控除の対象です。対象者には1月中旬に通知を送付。☎国保年金課①☎225-2123 ②☎225-2223 ③介護福祉課☎225-2393。

3010運動に協力を

会食などでの食べ残しを減らすため、最初の30分と最後の10分は自席で食事を楽しむ「3010運動」を推進しています。運動に参加し、食品ロスを減らしましょう。☎環境事業課☎225-2793。

厚木愛甲環境施設組合・事業報告会の内容をHPに掲載

ごみ中間処理施設整備事業の進捗状況などの報告会は感染症拡大防止のため中止し、組合HPに掲載します。☎厚木愛甲環境施設組合☎297-1153。

みんなの声でつくるまち

《パブリックコメント》

- 第2次教育振興基本計画案 ☎教育総務課☎225-2663。
- 教育大綱案 ☎企画政策課☎225-2450。
- あつぎの道づくり計画案 ☎道路管理課☎225-2300。
- 第7次行政改革大綱案 ☎行政経営課☎225-2160。

いずれも《閲覧期間》12月1日~1月4日《閲覧場所》各課窓口、市政情報コーナー、各公民館、本厚木・愛甲石田駅連絡所、中央図書館、あつぎ市民交流プラザ、保健福祉センター、市IP《応募方法》閲覧場所にある用紙で確認。

編集後記

アンケートで、人との温かいつながりを感じた経験をたくさん教えてもらいました。自分に余裕がないと他人に親切にするのは難しいと思いますが、不安な中でも隣人を気遣う人がいるのだと知り、胸がじんじんとしました。今もなお厳しい生活を強いられている方もいて、「前向きに!」と100%の気持ちでは言えない状況ですが、困っている人がいたら当たり前前に気遣い、声を掛けられる人でありたいと思いました/水野

**厚木の冬を
彩る光の世界**

街を美しく彩るイルミネーションが、今年も本厚木駅前に登場しました。テーマは「Atsugi Animal Party」。動物たちと、にぎやかな夜を過ごしてみませんか。
☎商業にぎわい課 ☎225-2840

点灯期間 2月14日まで
16時30分～24時

自然歳時記

●ウラナミシジミ● シジミチョウ科

羽を開くと30^{mm}ほど。羽の裏に褐色のしま模様があり、名の由来となっている。野原や河川敷などで秋ごろからよく見られる。冬越しはできないらしいがたまに見掛ける／飯山の畑で見つけた。 写真・文/吉田文雄



日照時間が次第に短くなる冬は、太陽の光がとてもありがたい。日当たりの良い畑に、桃色のラッキョウの花が咲いていた。ヤマラッキョウのような豪華さはないが、一輪の美しさは格別だ。

よく見ると、ハナアブがそっと止まって花粉を食べていた。そこにウラナミシジミも飛んできた。

こんな小さな花にと思っていると、もう一匹加わり仲良く蜜を吸い始めた。そこにもう一匹近づいてきて「あっ、密になる」と思った時、パッといなくなった。チョウにも、ソーシャルディスタンスが必要なのかと思った。こんな静かな時間を過ごせるのも、自然の豊かさのおかげと、感謝した。

厚木市の人口
(11月1日現在)



世帯数 10万1078世帯 (前月比20世帯減)



人口 22万3696人 (前月比47人減) 男11万5661人・女10万8035人